

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：34420

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2019

課題番号：18H05777・19K20969

研究課題名(和文) 教員研修の手法「Round Study」の効果の有効性についての検証と考察

研究課題名(英文) Verification of the efficacy of teacher training method "Round Study"

研究代表者

原田 三朗 (Harada, Saburo)

四天王寺大学・教育学部・准教授

研究者番号：70824621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：対話が繰り返されることで、教師たちの語りは授業に於ける一人一人の子どもの姿から、授業の目的や展開の仕方、各々がもつ教育観等についての語りへと変化していった。語りがこうした変化を遂げることで、そこで語られたことが参加している教師にとって汎用可能な考え方や指導技術、あるいは、教育観の形成へとつながっていく様子が見られた。

これらの変化は、Round Studyの特性である4人以下のグループ構成、席替え、話しやすい雰囲気、語りが見覚的に残されること等によって起こることがデータの分析から明らかになった。従って、Round Studyという手法は授業の事後検討会で有効に機能しているということがいえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

Round Studyという手法を活用した授業研究の事後検討会における教師の学びの姿について探究をした。小グループ活動における教師たちの語り合いは、授業における子どもたちの具体的な姿から出発し、授業の在り方や教科の目標等共有可能な知を創出する所まで深まりをみせた。このことから、自由に語り合うことのできる場を生み出し、そこで一人一人が発話する機会があり、多くの人たちとの交流を深めていくことで、そこに新しい知やより深く物事をとらえることができることが確認できた。本研究は授業の事後検討会という場におけるRound Studyの活用であったが、地域連携や企業研修などの場でも十分に活用が可能である。

研究成果の概要(英文)：As the dialogue repeated, the focus on teachers' narratives changed from the appearance of each child in the class to the purpose of the course, the way it should unfold, and the view of education that each educator had. Their narratives extended into theories of the content and teaching of the subject. It was evident that what they heard spoken in the process or what they told would lead participating teachers to acquire general ideas and teaching techniques usable in future lessons. Also seen was how what they heard or said would lead to the formation of educational views.

Analysis of the data highlighted the Round Study's defining features: a small composition of four or fewer members, seating shifts, an easy-talk atmosphere, and visible records of narratives. The analysis attributed the changes mentioned earlier to these distinctive features of the Round Table. Therefore, we can say the method called "the Round Study" will work effectively in the post-class review meeting.

研究分野：教育方法

キーワード：協働的な学び 教師教育 Round Study 教員研修 授業研究会

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

本研究は、応募者と石井（京都大学准教授）、黒田（京都大学研究員）が協同で開発した 少人数グループでの教師同士の語り合いを軸とした授業の事後検討会の手法『Round Study』について、これまでの取組の成果を踏まえ、さらに継続的に研究を深め、少人数グループを基盤とした教師同士の語りによって、そこにどのような学びが起きているのか解明していくことを目指した。Round Study を開発し、様々な学校での活用を進めていった時期には、『「Round Study」教師の学びをアクティブにする授業研究』（原田三朗・石井英真・黒田真由美著、東洋館出版社、2017）を刊行し、日本各地の 9 校の事例を紹介した。本研究は、そこに掲載されていた東京の A 小学校の取組をさらに継続的に研究するものである。研究スタート時の時点で明らかになっていたことは、この手法を活用することで、①事後研究会に参加した教師一人一人に発言の機会が確実に保証されること②それによって、対象となった授業が多面的多角的に捉えられ、授業の成果や課題が明確に言語化されそれを参加者全員が共有できること③授業提供者が参観者から多くのメッセージを受け取ることができることとともに、そこには励ましや受容的な言葉も多く含まれるので、授業研究会が授業者の意欲を高めることにつながることで、である。

2. 研究の目的

上記の経緯を踏まえ、本研究では、「フラットな関係性の中で語り合い、学び合う手法である Round Study の実践を通して、授業を実践した教師の授業に対する考え方にどのような変容がみられたのか」ということを、時間軸を設定して明らかにする。そして、それによって、Round Study の有効性を検証すること、そして、課題に応じ Round Study に改善を加えることである。

3. 研究の方法

(1) Round Study について

Round Study は、図 1 のように展開される授業研究会の事後研究会で用いるために開発された手法である。『ワールド・カフェ』という企業研修の手法を授業研究会の事後検討会に用いるために改良し、開発した。Round Study は、時間経過とともに Round 0、Round 1、Round 2、Round 3、Final Round、Round E の 6 つの Round が展開する。Round 0 で、研修のテーマを共有し Round Study の方法を確認した後、Round 1 から Round 3 で、小グループ（3～4 人）の活動を行う。Round 1 のグループが母体になるが、Round 2 で席替えを行い、その後、Round 3 で Round 1 のグループに戻り、成果物を生み出す。活動では、「肩書に縛られない」「全員に話す機会が保証される」「すべての意見が受容される」ことがルールとなる。また、席替えの時に前の Round での議論が伝わるように、テーブルに置かれた模造紙にかきながら話す。席を変えない 1 名のホストが、訪れた人にかかれたことばや図、絵を見ながら説明をする。このようにして語られた言葉を短いセンテンスにまとめ、Final Round で報告する。Final Round はその報告に基づいた全体討議の場である。Round E は、評価の Round で、本研修の振り返りをするとともに、主催者がそれをまとめ後日参加者にその成果を伝える。



図 1. Round Study の流れ

(2) Round Study における発話と教師の変容の分析

「Round Study を行うことによる教師の意識と具体的教育活動の変容」について、主に授業者を中心に、その変容をとらえる。変容をとらえるにあたっては、①発話数②気付き③発話内容の変化を中心に分析をする。また、どのような意識・具体的教育活動の変容があったかどうかという観点から、①授業についての考え方と具体的取組の変化 ②子どもにとらえ ③教材や教科に対する考え方 の 3 点から、その変容をとらえる。

(3) 複数年に渡る Round Study への取組による教師の意識変化の分析

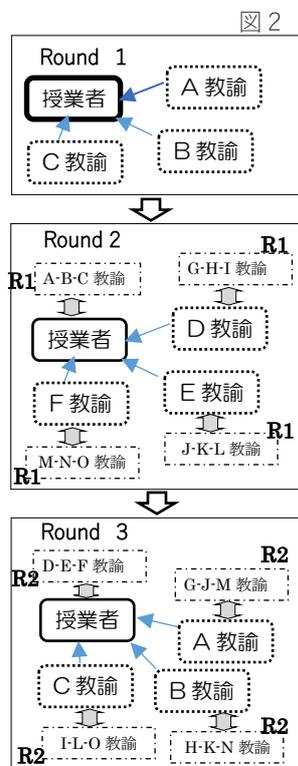
研究対象校である A 小学校では、これまで 5 年にわたって Round Study に取り組んできている。その取り組みによって授業研究に対する教師たちの意識の変化も現れているという報告が研究主任からあった。そこで、これまでの取組によって蓄積されてきた研修をまとめ、その時々に行われた教員へのアンケート、現在勤務している教師へのインタビューに基づき、Round Study 導入による教師たちの意識変化を分析する。

4. 研究成果

(1) 授業における子どもの具体的な姿から「現場の教育学」を創出する手法として Round Study は機能することが明らかになった

① Round Study における語りの重層性

Round Study では、短い時間の中で多くの教師の授業をとらえる視点や見方・考え方が交流される。例えば、Round Study に参加する授業者を中心にその関わりをみると、「Round Study の語りの重層性」(図2)に示すように、直接的には6人の教師と、間接的なものまで含めると15名の教師の意見が、テーブルの模造紙にかかれたものを見ながら交わされることになる。Round 1で、授業者は、教師A、教師B、教師Cの3名と交流をする。席替えを行うRound 2では、授業者は、新しく教師D、教師E、教師Fと交流する。この時点で、授業者は、授業を参観した教師6名から授業についての意見を聞くことになる。また、教師D、E、Fは、Round 1で、他のメンバーとの交流をしているので、それぞれの発話には、それぞれ異なった教師たちの視点や考え方が加味されている。Round 3では、今一度Round 1のメンバーが集まる。この時の意見交流は、Round 1とは異なり、メンバー4人が、他のグループで交流した後となるので、それぞれの意見には、Round 2で交流した他者の考え方が反映されている。Round 3では、これらをまとめて2つのキーワード、あるいは、センテンスを導き出すのであるが、Round 3では、間接的なものも含めると、授業者を含めた16人の視点や考え方が反映されることになる(4人×4グループの場合)。この教師たちの語り合いの場では、当然のことながら、その授業を参観した教師たちがとらえた多くの子どもたちの具体的な姿についての情報が交わされる。それらの子どもの姿と授業や教科に対する考え方がリンクしながら語り合いは展開していくのである。



② 事例の分析と考察

ア 生活科の授業研究 (2018年11月)

この研修では、「児童の中に進んで学ぶ姿が見られたか。また、その要因は何か」ということをテーマに授業研究会が行われた。授業では、子どもたちが体育館で小グループに分かれ、秋さがしで見つけて拾ってきたものを使った遊び道具づくりに取り組んだ。授業者は教職10年目。本校では1年目で、これまでに5回程、本校でのRound Studyを経験してきている。「本校に来て半年、いろいろな授業研究や校内研究の様子を見てきて、自分もすぐくチャレンジしたいなと思って」実践に取り組んだと、事後研究会の最初に語った。

イ Round1 ~Round3 での授業者の発話

図3は、授業者の発話数である。

授業者発話数	語り	同意	気付き
R1 32回	16回 (50%)	11回 (34%)	5回 (16%)
R2 43回	24回 (55%)	14回 (33%)	5回 (12%)
R3 32回	11回 (34%)	11回 (34%)	10回 (32%)

図3 Round1~Round3の授業者の発話数

言葉を交わす中で、次の人の発話が始まるまでの発話を1回(長短は関係しない)とカウントしている。「語り」は、授業における子どもの姿や子どもへの働きかけの意図などについて語っているものである。「同意」は、グループのメンバーの指摘や意見に対し、「そうそう」「そうなんですよ」などから始まる言葉に代表されるような同意の言葉や考えを授業者が話した数である。「気付き」は、「なるほどね」「そうか、そうか」などの言葉が含まれる新しい気付きや理解を授業者が示している発話である。

図3を見ると、Round 3で、授業者の「語り」の数が減ったこと(16回⇒24回⇒11回)と「気付き」を表す発話が増えていること(5回⇒5回⇒10回)があげられる。具体的には、「なるほどね、そうか。それが、なんかすごい腑に落ちたというか、自分の引っかかっている部分が…」といった言葉が、グループメンバーとの会話の中で生まれている。また、同じ「気付き」としてカウントされた発話でも、その内容をみると、Round 1では、「なるほどね」「ああ、なるほど」などの短い言葉であったが、Round 3では、自身が気付いたことについて、何が分かったのかを具体的に話している。

ウ 発話の具体的内容の変化

発話の具体的内容について示してあるのが図4である。Round 1からRound 3への展開で、顕著に表れているのが「子どもの具体的姿」についての語りの減少である。Round 1では28回あったのが、Round 3では10回に減っている。これは次のような理由からである。Round 1では、授業を参観してとらえた子どもたちの姿について多くが語られるが、それらが語られているうちに、授業者が知らなかったことやその教師だけがとらえた子どもの姿などについて、グループ内で共



図4 発話の具体的内容の変化1

有されるようになる。そのようにして授業における具体的な子どもたちの姿が共有されることで、自然と、「本時の授業はどのようなことが意図されて行われたのか」ということが話題になる。つまり、語りが具体的な子どもの姿から本時の授業のねらいや展開の仕方への変わっていくのである。故に、子どもの具体的な姿についての語りが減ることになる。このような語りの展開は、「事前にこうした手立てを講じておけばよかったというメンバーからの提案」「自分が課題としていたことに対する解答」(図4 「授業者の気付き」)などの授業者の気付きを生み出すとともに、ねらいに応じた単元の流し方についての語り合いへとつながっていくことになる。

図5は、実際に語られた具体的内容(右側)とその概要(左側)である。Round1では、秋遊びに取り組む子どもたちの具体的な活動の様子が多く語られているが、Round2になると、積極的に取り組んでいる子どもや気にかかる活動をしている子どもの姿から「目的をもって秋の材料を探したのかどうか」「机の配置にはどのような意図があったのか」などの問いが出される。また、「秋であそぶ、あるいは、秋のお店というイメージをどのようにもたせるのか」というように本時の授業や単元全体を通して授業者は何をねらっていたのかということに迫っていく問いも出されるようになる。こうした問いが、Round3での『秋遊び』のゴールを単元のどの場面で子どもたちと共有するか」「1年生2学期という段階を考えると、秋で遊ぶ具体的な共通体験が必要」などといった単元の構造、展開の仕方にかかわる意見や提案へとつながっていくのである。

<p>具体的な子どもの姿とその姿の解釈</p>	<p>Round 1</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・秋遊びに没頭する子どもの姿 ・楽器づくりグループの子どもたちの課題 ・どんぐりの穴あけの難しさ
<p>気になる子どもの姿とその子への対応 (授業前・授業中・授業後)</p>	<p>Round 2</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・目的をもって秋の材料を探したのか、材料から遊びを考えたのか ・どのタイミングで秋遊びのゴールを子どもたちがしっかりと認識するのか ・机の配置もゴール設定の仕方と異なる ・秋であそぶ、あるいは、秋のお店というイメージをどのようにもたせるか
<p>単元全体における本時の位置づけ 求められる単元の構想</p>	<p>Round 3</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「秋遊び」のゴールを単元のどの場面で子どもたちと共有するか ・1年生2学期という段階を考えると、秋で遊ぶ具体的な共通体験が必要

図5 発話の具体的内容の変化2

③ 「現場の教育学」の創出

石井は、『授業づくりの深め方』で、事後検討会において、「事例研究を通じて、一つの授業の出来事の意味を深く解説する一方で、その事実から一般化・言語化を図り共有可能な知を創出する契機を埋め込むことも重要」とし、「教育実践を語り意味づける自分たちの言葉と論理」を「現場の教育学」(石井, 2020)と呼んでいる。

Round Studyは、これまで述べてきたように、教師たちの語りによって、一つの授業の意味を解説し、そこから共有可能な知を生み出すことのできる「現場の教育学」を創出する手法であるということが、上記の実践分析、あるいは、他のRound Studyの発話分析によって明らかになった。

(2) Round Studyによって教師たちの学びの文化(教員同士の対話の日常化と授業研究の楽しさ、面白さの感得)が促進された

① 対象校における5年間の歩み *研究主任へのインタビューより ア Round Studyの導入(2014年度)

2014年度に初めてRound Studyを導入し、1年間で7回のRound Studyを授業研究の事後研修会で行った。導入のきっかけは、この年の春(3月)に京都大学のE.FPRUM(主に現場教員が集う研修会;主催・京都大学大学院教育学研究科)で、研究主任がRound Studyを体験し、対話によって協働知を構築していくこの手法に魅力を感じたからである。導入にあたっては、一部に慎重論もあったが、実際に行ってみると「意見を出しやすい」「参加者全員に発言の機会が保証されている」など肯定的な意見がほとんどであった。

イ 2年目から4年目(2015、2016、2017年度)

3年間で、21回のRound Studyを実施した。この時期は、Round Studyの定着の時期であるといえる。目立った変化はないように見えて、実は、職員の対話の日常化が促進された時期と考えられる。意見を言い合える学びの土壌、学び合う同僚性が構築され、事後研修会に楽しく取り組み、より、学びを深めていこうとする発話が多く聞かれるようになった。また、それとともに、その発話の中に子供の具体的な姿が多く登場することが大切なのではないかという考えが出されるようになった。学びの土壌ができてきたことにより、「授業研究の楽しさ、面白さ、深さ、難しさ」などが浸透していった時期であるともいえる。

ウ 5年目(2018年度)実施回数8回。

この年には、8回のRound Studyを実施した。これまでの研究のスタイルがある程度固まってきた時期である。Round Studyの展開の仕方研修の内容と職員の意見に応じて変化させてきた。「講師がいなくても、自分達の話し合いでの学びを大切にしたい授業研究をしよう」「リフレクションの時間を大切にしよう」「準備に準備を重ねて、指導案通りに流れる授業を目指すことから卒業し、子供の学びの姿から学ぼう」という提案がなされ、授業研究の方向性が、仮説検証型から、経験理解志向型に切り替わったといえる。また、リフレクションを大切にするという姿勢が、協議会のみにとどまらず、校内研究全般、日常の授業全般にわたって重要視されるようになる。

エ 6年目(2019年度)

中心的に研究を牽引していた若手教師が転出をしたが、その若手教師たちが転出した学校でRound Studyを活用した研修を提案し、実際に実施することができた。本校でもRound Studyを継続的に実施した。

② 教師たちの学びの文化の構築

上記のインタビューの中に、「Round Study の展開の仕方も研修の内容と職員の意見に応じて変化させてきた」とある。Round Study は、基本的な形は提案しているが、決してこれに従うように求めているものではない。むしろ、インタビューにあったように、研修の内容や教員集団の意思によって形を変化させることが求められる。授業が目前の子どもの実態に応じて変化すると同様である。そうでなければ、形骸化は避けられない。また、教師が学びに向かおうとする意欲も削がれてしまうことになる。この点、A校では、5年目に入り Round Study の形を変化させてきたことは重要なことである。また、「講師がいなくても、自分達の話し合いでの学びを大切にしたい授業研究をしよう」「リフレクションの時間を大切にしよう」「準備に準備を重ねて、指導案通りに流れる授業を目指すことから卒業し、子供の学びの姿から学ぼう」というようにその学校の教師集団自身によって学びを構築していこうとする姿勢がみられるようになった。授業研究が受け身ではないという証であるともいえる。研究主任のインタビューから、Round Study の継続が教師たちの学びの文化の構築に大切な役割を果たしてきたことが明らかになった。

③ これからの Round Study

転出して Round Study を行っていない故にみえてくる Round Study の効果や課題を報告しつつ、Round Study の効果や課題について考える『Round Study 研修会』をまとめとして企画し、2月22日に四天王寺大学ハルカスサテライトキャンパスで日本各地から30名を超える参加者を迎えて行う予定であった。しかし、コロナウィルスが広がりを見せ始めた時期と重なり、直前に中止せざるを得なくなった。この研修会では、研究対象であるA小学校から、長年 Round Study を実践してきた研究主任と他校へ転勤しそこで新たに Round Study を実践した2名の若手教師による鼎談を企画していた。

ソーシャル・ディスタンスをとることが求められる時代にあって、Round Study をどのように展開していけばよいのか、模索中にある。遠隔での Round Study を実践してみたが、やはり、対面とは違う。むしろ、実際に出会い、語り合うことの重要性を再確認するに至った。

<引用文献>

- 石井英真、2020『授業づくりの深め方 「よい授業」をデザインするための5つのツボ』ミネルヴァ書房、
- 石井英真・原田三朗・黒田真由美、2017『Round Study 教師の学びをアクティブにする授業研究』東洋館出版社、

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 原田 三朗	4. 巻 第7巻
2. 論文標題 「語り合う」ことを通して、学びを深める大学の授業 - Round Studyを活用した教科内容論「生活」の授業実践についての検討	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 四天王寺大学 教育実践論集	6. 最初と最後の頁 37 - 59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 原田三朗
2. 発表標題 授業研究事後検討会の手法 Round Studyの検討 1年生活科の事後研究会における授業者の語りを中心に
3. 学会等名 日本カリキュラム学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田三朗 伊東大介
2. 発表標題 対話的な校内研修の手法「Round Study」の 効果の有用性についての検証と考察 Round Study 5 年間の歩み
3. 学会等名 日本教師教育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 原田三朗
2. 発表標題 「学生の学びに向う力」を育むRound Studyの活用 教科内容論「生活」の授業実践についての検討
3. 学会等名 日本教育方法学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----